

## ■ 全国縦断仕事おこしシンポジウム ■

源を見つけ出し、磨き上げ、活用する。」としました。物産開発の事業、7月中旬オープン予定である山里の宿の明日香荘、カヌーや釣りなどが楽しめる遊湧自然館さざなみ、北アルプスと安曇野が一望できるレストランたかがりの事業を計画しています。環境問題についても、たとえば4月にオープンするさざなみには自動販売機ゼロをめざせというテーマを出しています。また、地域おこしや会社指導では、手作り、手仕事でできた商品の新

しい市場をつくりたいとも考えています。大量生産・大量流通・大量販売・大量消費・大量廃棄という環境破壊の社会を越えていくためにも、農業、農産物、加工品、手作り、手仕事でできあがったものにもう1回目を向ける必要があります。そして地域の中だけの流通ではなく、地域間のネットワークをもった流通システムをつくりだしていきたいと思っています。



### シンポジウムを終えて

感想

田中夏子（長野大学教員）

全国縦断仕事おこし・まちづくりシンポジウム、信州の集いは、五つの点で、印象深かった。第一は、農・里山・環境との深い関わり、第二に、個性的で「等身大の手法」へのこだわり、そして第三に、仕事や活動の質に対する考え方、第四に、見過ごされていた既存の資源を新たな視点で再評価・再活用する取り組み、第五に制度の改革や創造への志向である。

第一の点は、生活の傍らに常に農があり、里山がある中山間地ならではの特徴であろう。村山さんの話からは、暮らしの具体的な課題から軸足をずらさない、時間をかけた活動が、時として頑迷な農村地域社会の

共感をも生んでいった過程がうかがえた。伊藤さんは、経済活動としての農を核としながら、その可能性を、環境、福祉、学び・雇用の場面にも広げていくことで、地域の諸資源が相乗的にその輝きを発揮できるよう、コーディネートする役割を担ってきた。滝澤さんもまた、手法は異なるものの、農業を柱に村民出資の事業体を展開するなど、一人ひとりの仕事の喜びと公益的な事業の提供との両立を各地で呼びかけてきた。

「構造改革」の論理からは、真っ先に矢面に立たされる「農」が、実は極めて多くの潜在的な力を宿していて、今各地で、その

## ■ 全国縦断仕事おこしシンポジウム ■

潜在力が一つひとつ発見されている。

第二の問題は、前半の宮本憲一先生の問題提起もあって、事業組織・活動組織の規模のみならず、私たちが暮らす地域の適正規模とは何か、すなわち市町村合併問題とも関連づけた発言が続いた。社会に一人ひとりの固有の役割があることの重要性、そして、だからこそそのコミュニケーションの成立を強調した村岡さんは、それを「役割と作業を取り戻す」というスローガンでわかりやすく表現する。

「適正規模」の必要性は、環境の視点のみならず、人間を大事にするという視点からも導きだされることが再確認される論点であった。

第三は、労協の議論でいえば「よい仕事」をめぐる論点である。原山さんは、事業を切り開いていく時の苦労の中から、人間尊重の協働労働が見えてくることを示唆し、労協のエッセンスを端的に訴えた。畠山さんは、会場から出された「ボランティア仕事」と「事業体としての仕事」の違いについての質問の応えて、「非営利事業体の場合、営利企業の仕事以上の精度をもって事にあたらなければならない」と指摘。後に聞いた裏話では、その前の週に、NPOで受けた仕事で、夜通しお弁当詰めに追われながら、「この仕事を疎かにして万が一のことがあったらどうするのか。会社と違って、組織は責任を負ってくれない。」と痛感したとのこと。

第四の資源の発見とそのコーディネートは、「花と蜜と湯の流れる里づくり」を手がける伊藤さんや、地域内の資源のネットワークと同時に、地域間で「手仕事の流通

経路」を構築しようと呼びかける滝澤さんの言葉に象徴されよう。村岡さんの施設でも、村の人が手塩にかけた農産物を施設に持ち込んでくださるといふ。そこで村では、現代の社会構造の中では「生産調整」でしかない「余剰作物」が、本来の価値を取り戻すことができるよう、地域通貨の導入を研究中だといふ。

第五の制度改革については、労協法につながる指摘として、畠山さんが、NPO法人の抱える税法上のジレンマを取り上げ、既存の法律を、非営利事業者にとって、より使い勝手のよい道具へと仕立て直していく必要性を強調した。

宮本先生の講演で指摘された「内発的発展の第二段階」が、シンポジストと参加者によって極めて具体的に、また、多様な発展の方向性をともなって語られた集会であった。

